

a 学校教育目標	郷土に誇りをもち、夢や目標に向かって主体的に取り組む子どもの育成	b 経営理念 ミッション・ビジョン	【ミッション】(自校の使命) 子どもたちの未来を保障し、地域とともにある学校 【ビジョン】(自校の将来像) 郷土に誇りをもち、夢や目標に向かって主体的・協働的に課題解決に取り組む子どもを育てる教育活動を創造する。
----------	----------------------------------	----------------------	---

評価計画						自己評価					改善方策	学校関係者評価			
	c 中期経営目標	d 短期経営目標	e 目標達成のための方策等	f 評価項目・指標	g 目標値	10月	2月	i 達成度	j 評価	k 結果と課題の分析	n 改善方策	l 評価			mコメント
						h 達成値	h 達成値					適正	不明	不適正	
確かな学力の育成	自ら考え、自ら学びに向う児童の育成	基礎・基本の定着	学力向上に向けた取組の充実(授業改善・授業力向上・学力向上強化週間、桜山タイム)	①国語科(漢字・学期末の平均)・算数科(学期末)のテスト80点以上の児童80%以上 ②NRT各教科の標準偏差が昨年度以上(各学年)	①国・算のテスト80点以上の児童80%以上(1・2年生は90点以上の児童90%) ②全学年昨年度の標準偏差以上	①1・2年国:84.4%算:75.1%3～6年国:83.1%算:81% ②30%	①1・2年国:80%算:61%3～6年国:77%算:80% ②30%	①1・2年国:89%算:68%3～6年国:96.2%算:100% ②30%	B	1・2年生の結果では、国語科・算数科の両方の達成値が下がっている。国語科については、思考力の分野に課題が見られた。3～6年生では、全体の達成値は下がったものの算数科の達成値は80%を維持している。しかし、全体として思考力の分野に課題が見られた。クラスによっては全体の半分が目標値に到達していないという実態もある。	・つまづきがあった単元・領域を分析し、桜山タイムで反復学習を中心とした対策を行う。 ・単元・領域を焦点化して授業改善を行い、1時間の授業での理解度を上げる。 ・スマイルタイム等で、習熟度別または個別の指導を行っていく。 ・桜山タイムや放課後の学力補充など、担任外の教員と連携し組織的な取組を行う。	○			・結果と課題の分析が適切であり、見直しながら具体策を示している。 ・桜山タイムの実施、そして担任外も学力補充に取り組むことは組織的で良い。
		学習意欲の向上(学びに向かう力の育成)	プロジェクト型学習の考えを基にした単元開発(カリキュラムマネジメント、課題発見・解決学習) 家庭学習強化週間の実施	二中校区アンケートにおける肯定的回答 ①「将来の夢や目標をもっている」 ②「授業では、課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいる」 ③「地域や社会をよくするために何をすべきか考えることがある」「学校がある地域のよいところを知っている」	①80% ②80% ③80%	①88.7% ②89.6% ③85.4%	①88.6% ②93.0% ③84.3%	①110% ②116% ③105%	A	①夢や希望をもっている児童は学年が上がると数値が低くなりがちである。②自分で考えたり行動したりするなど、主体的に学ぶ児童は増加している。③単元で取り組みを行っているが、地域や社会のことを考えているという捉えになっていない児童が多く見られた。目に見える形での達成感が足りないことも理由として考えられる。	・目標の設定、活動方法や内容を自己決定を継続する。 ・R80での振り返りの時間確保、そしてゆとりのある授業設計をし、相互評価や外部評価を通して達成感を持たせられるようにする。 ・地域の人やものと具体的に関わる学習単元を設定し、郷土愛を育んでいけるようにする。	○			・思考分野の課題に関しては、パソコン・ゲーム等の情報量が多過ぎる現代のマイナス要素が関係しているのではないか。
豊かな心の育成	生活指導項目の指導の徹底と体験活動の充実による豊かな心の育成	生活指導5項目の指導の徹底	あいさつ、時間厳守、ピカピカ無言掃除、右側歩行、靴揃えのうち、重点「あいさつ」の徹底	児童アンケートで、三原小あいさつレベル3(元氣よく・相手を見て・あいさつを返す)ができていると実感する児童の割合	90%	70.5%	73.8%	82.0%	B	10月時点の数値より向上はしているが、目標値には届かなかった。3%の向上は約15人程度が上向きになったと捉えられるが、目標値まで20%程度と考えと、約100人の意識を変えていく必要があることが分かる。 学年別に見ると、高学年になるにつれ、達成率が低くなっている。最も達成率が高い学年は4年生であり、4年生でのあいさつの取組を他学年に発信できれば、学校全体として向上できると考えられる。	・最も達成率が高かった学年の取組を学校全体に発信し、あいさつのよさ、とりわけ、あいさつを受けることの気持ちよさを感じさせながら、あいさつが大切なコミュニケーションツールであることを各学級で指導していく。 ・あいさつウィーク等、児童が意識的にあいさつができる期間を設け、教師がよいモデルとなってあいさつをしていく。 ・あいさつをするためには、自分自身が「明るない気持ちでいることが前提にあることから、日々の学校生活が楽しくなるよう、学習面、生活面、人間関係等の悩みを解消できるよう、楽しい場づくりやカウンセリングマインド等について教職員で研修していく。	○			・気持ちの良い挨拶ができるよう人間関係を深める取組をされている。あいさつレベルの向上や定着に向け、継続した取組をお願いする。 ・課題を踏まえ、カウンセリングマインド等の研修を実施されていることが良い。
		自己肯定感の向上	友達との関わりの強化 認め合う集団づくり	QUアンケート、学校生活意欲総合点の分布において、28点以上の児童の割合	80%	80.7%	85.9%	107.0%	A	10月時点より更に向上し、目標値を上回ることができた。各学級での肯定的な評価が多くなったことで、児童の意欲が向上したと考えられる。QUアンケートで「親和的なまとまりのある学級集団」と判定されたのは、15学級中9学級であり、アンケートを取り始めて以来、最多であった。 また、縦割り班活動を始めて2年目の今年度、活動を通して異年齢間のコミュニケーションの場も増え、日常の場面で会話をしているところも見られる。	・各学級においての係活動や当番活動、高学年については委員会活動等、自分自身の役割を自覚させ、やらせきすることで達成感や自己有用感を味わわせていく。 ・生活場面、学習場面ともに、友達との関わりを意識的に増やせるよう、関わる時間を確保していく。 ・縦割り班活動のみならず、選挙管理委員会等、異年齢間の集団を意識的ににつくり、協働する場や時間を設定していく。	○			・見守り活動の中で、高学年が信号で班全員が渡り切れるか判断して渡る、1年生を気遣いながら登校するなど縦割り活動の良い面が日常でも発揮されている。
健やかな体	健康教育と教育活動の工夫による運動能力・体力の育成	運動習慣の定着	① 体育の運動量の確保 ② わんぱくタイム	① 児童・教職員の運動アンケートによる評価(学期に1回) ② わんぱくタイム(運動遊び)への参加率	①80% ②90%	①92.3% ②88%	①90.3% ②70.5%	①112.8% ②78.3%	B	①の児童・教職員のアンケートの結果から、体育の時間で体を動かすことが実感できた児童が多かったことが分かる。 ②のわんぱくタイムのアンケートの結果から、上半期と比較してわんぱくタイムに参加する児童が大幅に減少した。体育委員会が中心となり児童に呼びかけたり、自由遊びを取り入れたりすることで楽しく運動を行うことはできた。しかし、気温による外遊びの中止及び感染症対策のための延期等があり実施が難しかった。そのため、参加しようとする児童の意欲が徐々に低下し、そこに向けての具体的な手立てができていなかった。	①に関して、児童の運動量の確保のために体を動かしたと実感できる授業づくりを来年度も引き続き意識して行っていく。 ②に関して、全学年がしっかり運動ができるように低・中・高と学年を分けて、運動ができる日程を増やしていく。また、運動への苦手意識をなくすために、勝ち負けのないものや児童が手軽に継続して体を動かす機会を作っていく。	○			・大谷グローブの効果的な活用が本校の課題解決につながることを期待する。 ・教職員による食育劇の継続、全学級での食育授業の実施など食に関する興味・関心を高めるための工夫がされている。あわせて「もったいない精神」との関連指導を行ってみてはどうか。
		食習慣の定着	① 栄養教諭と担任とのT.T.授業全学年 ② 日々の給食指導	食に関する児童アンケートによる評価	① 100% ② 80%	①50% ②90.3%	①100% ②84.75%	①100% ②105.9%	A	①は、全学級で食育授業を行うことができた。 ②は、上半期と比較した場合、一口チャレンジに取り組めた児童が少しずつ増えていった。低学年の食わず嫌いが多いことはあるが、教職員の積極的な声掛けや食育劇を通して、少量でも食べようとしている児童も多い。今後も児童に食べていくように声をかけ続け、食べることの楽しさを味わえる経験を増やしていく必要がある。	①は、担任と連携しながら食育に関する指導を児童の実態に合わせて行っていく。 ②栄養教諭が給食時間に各学級を回りながら、食べることの楽しさを味わうように声をかける。また、全教職員が一口チャレンジ(少しでも味わってみる)の意識をもち、呼びかけを行っていく。	○			・食育は学校だけではなく、保護者や就学前の機関の考え方も関係してくるので密な連携を望む。
信頼される学校	保護者・地域から信頼される学校づくり	地域を繋ぐ教育活動の工夫	①地域の行事への参加等(ゲストティーチャーの奨励、幼・保・小・中の連携) ②学年便りの作成 ③HPの更新	①各学年、年に1回以上 ②③月に1回以上	100%	100.0%	①100% ②100% ③100%	100.0%	A	①は、総合的な学習の時間を中心に、児童の思いや願いに合わせて地域と連携して活動を行うことができた。研究推進リーダーが窓口になって地域の方と打ち合わせをし、目的をもった活動になった。 ②月の始めを意識して計画的に、学年の行事や学習の様子等を内容に取り入れて作成することができた。 ③ICT企画部が中心となり、HP作成日を設定したり締め切り日を設定したりすることで、月に1回の更新を行うことができた。	①今年度、連携した諸機関や相手先をデータで保存したり、活動内容を記録したりしておき、来年度の活動がスムーズに行えるようにしておく。 ②学年間で声をかけあって、作成者や内容を決めることができていたので、来年も役割分担をして計画的に作成できるようにする。 ③ICT企画部が、作成の方法や内容を提案し、具体的に作成日を調整することで、スムーズに更新できたので継続していく。	○			・これまで地域とつながった活動があり、それらを計画的に進めていることが良い。 ・働き方改革は行政側の問題も多いと思うが、教師自身が課題を踏まえ校内での改善策を工夫するなど、業務改善が進んでいる。
		働き方改革(次世代の働き方への体制づくり)	計画的な時間外勤務の短縮 業務改善の推進	時間外勤務月45h以下を6か月以上実施	100%	45.2%	93.5%	93.5%	A	今年度の時程を週二日(火・木)変更し、放課後に各自が業務出来る時間を確保したことが効果的であった。また、時間外勤務の縮小を図ることに対する個々の職員の意識の向上や教務部が中心となり、業務の繁忙期に備え、切に係るスケジュールの提示や勤務時間内での業務時間確保を行ったことも成果につながっていると考え。加えて、昨年度の課題であった人数が多い学級や業務が重なっている時期の職員へのサポート体制を整えることで業務量の平準化につなげた。 5部会の設定回数が少なかったため、部内での進捗確認や調整については課題が残った。	業務時間確保に有効である時程変更や繁忙期の計画的な授業時数カットについて、今年度の結果を踏まえながら設定の時期を検討し継続する。 また、各部内で互いの業務をより意識し、進捗確認や調整をすることができるよう、月末火曜日に5部会を設定し、毎月第一火曜日を5時間授業とした定例会議につなげる。 各部の年間計画や行事のあり方については、児童にとって魅力的で豊かな教育活動となること、そして働き方改革の推進にもなるよう継続して検討を行う。	○			・学校運営については教職員の心身の健康が一番である。学年の枠を越え三原小学校のチームワークで子どもたちと関わる時間の確保に向け努力されていることが素晴らしい。

【j: 自己評価 評価】

A: 100≦(目標達成) B: 80≦(ほぼ達成)<100 C: 60≦(もう少し)<80 D: (できていない)<60

【l: 学校関係者評価 評価】

イ: 自己評価は適正である。 ハ: わからない。

ロ: 自己評価は適正でない。